



Title	嫉妬する目：ブラジルにおける邪視と社会格差
Author(s)	奥田, 若菜
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 117-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

嫉妬する目——ブラジルにおける邪視と社会格差

奥田 若菜

大である。また、邪視の「事実」は周囲の人びとともに作り出されるのではなく、事後的に生活史のなかで編み出される。つまり、富裕地域では邪視に関する語りには、被害者本人の視点しかなく、他の参加者が不在である。富裕地域の邪視は、日常世界から離れたところで用いられている。

〈要旨〉
世界で広く見られる邪視は、これまで妖術研究の一部としてのみ研究されてきたため、十分に分析されてこなかった。本論の目的は、ブラジルを事例として、邪視の詳細な記述と分析を行い、この空白を埋めることである。調査対象はブラジリアの富裕地域と貧困地域、そして北東部の貧困地域である。語りの比較から貧困地域と富裕地域での邪視の差異を明らかにする。

キーワード
ブラジル 邪視 民俗信仰 社会格差 貧困

邪視の存在が自明視され、日常生活に根付いている貧困地域では、邪視によって引き起こされたと考えられる問題は基本的に軽微である。例えば、草花が枯れる、子供が風邪を引く、モノが壊れる、といったものだ。もう一つの特徴として、邪視の構築が社会的であることを挙げられる。つまり、貧困地域ではある出来事が邪視によって引き起こされたという「事実」が構築されるには、その場で居合わせた人々の語りの過程が不可欠である。

一方、邪視の存在が公には否定されることの多い富裕地域では、邪視によるとして語られる被害は、試験の不合格や計画の頓挫などのように、重

1. はじめに

あるモノがそれを羨む気持ちによって悪影響を受けるという考え方（信仰）は、本論で事例とするブラジルのみならず世界中で広くみられる。ブラジルで「太った^田olho gordo」、「大きな^田olho grande」、「嫉妬する^田olhos invejosos」、「悪い視線^{mano olhado}」などとよばれる邪視に対する考え方は、ブラジル国内においても一様ではない。

本論では、ブラジルの貧困地域と富裕地域でみられるまったく異なる二つの邪視の語りに注目する。簡単に述べると、邪視が頻繁に語られる貧困地域では邪視は軽微な被害を与えるモノとして捉えられているが、富裕地域では、邪視があまり語られない反面、日常生活に与える影響は重くなっている。

貧困地域と富裕地域でみられるそれぞれの邪視の関係性は、ゲシーレをはじめとする研究者らによる妖術に関する指摘を想起させる。ゲシーレは、妖術の通時的研究を行い、近代化により妖術が衰退するのではなく逆に盛んになることをカメールンでの調査事例をもとに示した。

教育水準や経済的状況が上昇することにより民間信仰が弱まっていくという従来の説明は、ブラジルの邪視信仰には当てはまらない。本論ではその具体例を提示したい⁽¹⁾。これまで、邪視の地方性や、各国の邪視の特徴について研究されてきたが、そもそも、民間信仰の伝統的もしくは一般的な語られ方が、当該社会全体に共有されて

いるとは限らない。信仰に対する態度や語りの変化が、どのような要素によってもたらされるのかを考察する必要がある。本論では社会階層に注目し、貧困地域と富裕地域における邪視を考察する。貧困地域では邪視が人びとの生活世界に組み込まれているのに対し、富裕地域では、主に過去を振り返り生活史を語る状況において、邪視が用いられるることを明らかにしたい。

2. 邪視とはなにか

邪視は地域によって大きな違いがあり、一般化は困難である。報告されているすべての邪視が以下の定義に当てはまるわけではないことを断つた上で、典型例としての邪視を簡単にまとめる。邪視とは、羨む気持ちをもつ人が視線や言葉により、他人やモノに損害を与えるという考え方である。道具や複雑な手続きを必要としない。邪視持ちが周囲から特別な力を身につけた人として敬われたり、恐れられたりすることはなく、むしろ厄介者として受け止められる。対象となるモノに送られる視線は、褒め言葉を伴うことが多い。そして、邪視に遭うことはちょっとした災難として捉えられている。つまり、妖術のように人びとから恐れられ同時に敬われるような偉大な力をもっているとは考えられておらず、被害にあったとしても日常でのささやかな出来事として受け止められる傾向にある。

先行研究では、さまざまな観点から邪視が分析してきた。邪視の動機とされる嫉妬心に注目した論文には、言葉（褒め言葉）との

関係を分析したものがある。邪視告発から当該社会の人間関係、権力関係などを分析する研究では、富の不平等な分配や欠乏、村社会の道徳価値システムの表現としての邪視告発などが挙げられる(Foster 1972, Herzfeld 1981, Galt 1982)。また、医療人類学の立場からは、邪視を錯覚や妄想として記述したり、民俗疾病として扱ってきた。

日本で邪視について初めて論考を提出したのは南方熊楠であった。明治四十二年の論考で南方は各国の邪視の特徴を述べて、日本に伝わる民話との類似を指摘している。邪視、視害、邪氣などの用語の違いを示した上で、邪視を避けるために、人びとが故意にモノを汚したり損なったりする事例を挙げている。用語に関しては、伊東が邪視と褒め言葉の関係性を分析したうえで、「邪視がもたらす目の外形的特長は、いざれも「我々」の規範を逸した一種の身体的異常であり、「誰かに妬まれているのではないか」という潜在的恐怖が、はつきりとした身体的特徴をもった特定の他者に投影される時「邪視」が現象する」(伊東 1996:61)と述べている。

邪視研究はこれまで、妖術研究の一部として行われることが多かった。例えばSTEINは邪視を妖術コスモロジーへと組み込んでいる(STEIN 1974)。社会を脅かすような大きな災いをもたらし、加害者への告発が日々的に行われる妖術は、当該社会に与える影響も大きい。それに対し邪視は、被害も小さく、告発もあまり行われない。そのため、邪視に十分な注意が払われてこず、研究が進んでいないと指摘されている(GALT 1982、内藤 2000)。従来の邪視研究で

は、邪視の特徴、邪視を放つ者と放たれる者の社会関係、邪視のもつ社会的役割などが対象であった。これまでに多様な視点から分析され、その社会的意味を議論してきた邪視は、当該地域における固定的なものとして描かれる傾向があった。このような先行研究の動向に対して、内藤は、邪視が日常を構築する努力のひとつ的方法であると指摘したうえで、生活世界における邪視に注目する必要性を説いている(内藤 2000)。

邪視をめぐる現象は妖術と較べると目立つ出来事ではないが、だからこそ日常生活の一部として深く組み込まれており、当該社会の人びとの日常を構築する上での重要な要素の一つであるともいえる。

本論では、邪視そのもののへの注目に立ち戻り、ある一つの地域において、邪視による攻撃と被害、そして邪視除けの語られ方や表現の変化に注目する。事例はブラジルの富裕層と貧困層である。社会階層や権力関係に焦点を当てた従来の邪視研究とは異なった視点から、邪視と社会階層について考察したい。これまでの研究では、妬みが社会格差によって引き起こされる例に注目することが多かった。

本論では、邪視の加害者と被害者を権力関係や経済格差の観点から論じるのではなく、それぞれの階層において邪視がどのように捉えられ語られるのか、ブラジルでの邪視の多様性について分析する。妖術の調査を行ったゲシーレは、民間信仰が近代化によって衰退せず、逆に強まっていくことを明らかにした。カメリルーンでは政治経済の変化の影響を受けて妖術などへの信仰が高まった。ゲシーレによれば、妖術のもつ複数的解釈可能性が、急激な変化への多様な

解釈を可能としたためであった。韓国巫俗を研究した崔は、文明や教育の普及によって民間信仰などが廢れていくというよりむしろ、多様に様変わりすると指摘している（崔 1994）。本論では社会階層による邪視信仰の差異を明らかにするため、ブラジルの貧困地域と富裕地域の具体的な事例を紹介する。貧困地域では邪視が生活世界の一部としてあり、その場に居合わせた人びとにによって構築されているのに対し、「迷信深くない」「教育のある」富裕地域では、生活史の語りにおいて邪視による被害が語られる。また、貧困地域よりも富裕地域のほうが邪視によつて引き起こされる被害が大きくなっていることを明らかにする。

調査は、二〇〇五年から二〇〇六年にかけて以下の三ヵ所で行った⁽²⁾。1、ブラジリア連邦区の富裕地域プラノピロット（及びその近郊）、2、貧困地域であるブラジリア連邦区の衛星都市、3、同じく貧困地域であるブラジル北東部の農村地域。

ブラジリア連邦区は一九六〇年に遷都されたブラジルの首都である。1のプラノピロットには国会議事堂や各省庁、各大使館、中央銀行などの高層ビルが立ち並ぶ。プラノピロット及びその近郊のラゴスル、ラゴノルチは議員や官僚、大学教員、企業の重役などの富裕層居住地である。ラゴスルの平均月収は最低賃金の約六六倍に達する。2の衛星都市は、主にセイランジャ行政地区を取り上げる。一九七一年に完成した行政地区で、首都完成後にプラノピロット近郊に広がった不法占拠者を居住させるためにつくられた。ブラジリ

ア建設にかかわった元単純労働者や、首都に仕事を求める移住者らで構成されている。平均月収は富裕地域の十分の一である。3の北部農村地域は、豊かな南部と対比されるブラジルの代表的な貧困地域である。沿岸部は観光化されているが、筆者の調査した内陸部では農業に適さない土地が多い。生活保護や年金で生計をたてる家庭も多い。本稿の事例分析では、2と3を貧困地域としてまとめている。

調査で得られた事例は、インタビュー調査と参与観察によるものである。二人以上が同席する場において邪視について述べることは、場合によっては好ましくない。同席者を邪視持ちであると回答者が考へている場合などである。そのため、基本的にインタビュー調査は一対一で行った。例外的に衛星都市の市場では、人びとが邪視について会話を始めたため、複数人に同時に質問を行つた。回答者は、年金生活者、自営業者、市場露店主、市場労働者、無職者、学生、会社員、公務員、教員、大学教授である。

3・日常生活における邪視

邪視は日常のどのような場面でみられるのだろうか。邪視信仰の存在は、邪視除けというかたちで可視化される。邪視除けの典型的なものは、屋内や食堂などに掲げられた壁掛け張り紙にみることができる。衛星都市のある食堂には、レジの横に張り紙がある。そこには以下のように書かれている。「もし私たちがうらやましいと思

うなら、私たちと同じようにしましょう。働くことです」。北東部のある家庭では、「嫉妬しないで、私はただ働いているだけだから。」と彫られた木製の壁掛けが掛けられていた。また、「蛙も『大きい目』を持つているが、蛙は泥沼にしか住まない」という文言の壁掛けもある。泥沼に住むというのは、貧しい生活をするという意味である。これらは、貧困地域でみられたものである。富裕地域での邪視はこれと比べると可視的ではない。

邪視除けが目に見える形で日常生活の場にあるのに対して、邪視が「実行」され、被害が起こる場は見えにくい。邪視の被害に遭ったことをなるべく周囲には語らない傾向があるためである。被害に遭ったと語ることは、「邪視に遭うほどよいモノをもっている」という表明になり、それが新たな邪視を呼ぶ恐れがある。

貧困地域と富裕地域で語られるそれぞれの邪視はどのような特徴をもち、どのように異なっているのだろうか。邪視被害についての語りを事例に、以下で論じていく。まず、典型的な邪視ともいえる貧困地域での語りをみていただきたい。事例はすべて仮名である。

3・1 貧困地域での邪視の語り

日常の会話では、邪視という言葉はどのような状況で使われるのだろうか。典型的な事例を紹介しよう。セイラン・ジャ行政地区の中心部にある市場での一場面である。とある露店の露店主が、売り子らのためにスイカを買ってきていた。売り子らがそのスイカを食べていたときの事例をみてみよう。

スイカを買ってきた露店主は、バケツから二本のスプーンを取り出し、スイカに添えた。そして、「スイカ食べなさい」とその場に居合わせた者に声をかける。十一歳の売り子がスイカの近くにおり、スプーンで掬いながら食べ始めた。少し離れたところにいた売り子の母が、「私に持ってきて」と彼女に頼む。売り子はスプーンで大きめにスイカを掬い、もう片方の手をスプーンの下に添えながら母のほうに向かおうとする。露店主ともう一人の売り子に「見ないで、見ないで。見たら落ちちゃう。」と笑いながら声をかける。

売り子は母に一掬いのスイカを持っていったあと、再びスイカのところに戻ってきて自分のためにスプーンで掬う。その瞬間、掬ったスイカが床に落ちてしまう。売り子は笑いながら恥ずかしがる。露店主はそれをみて「私は見なかつたわよ」と、売り子に笑いかける。売り子は「私自身よ」と笑う。露店主は「ひどい『太った目』ね。」と言う。

この事例からわかるのは、邪視の存在が人びとの間で共有されているという点である。このように、貧困地域では邪視に対する共通認識がみられた。次に紹介する事例は、四十年代女性マリアが語ったものである。ブラジル北部生まれで、成人の息子二人と長男の妻子と同居している。中等教育終了後に知人の紹介によって安定した仕事を得たが、体調を崩して辞職した。現在は、知人に頼まれて洋服の修繕をしたり、刺繡などの手芸品を作つて生計を助けている。

「七回婚約した」が、一度も結婚していない。長男は大学を卒業して働いているが、次男は中等教育を中退し、働き出した。マリアの現在の悩みは、次男が彼女の忠告を聞かず勉強をやめてしまったことである。「（中等教育を中退したことを）息子はきっと後悔する。

私だってもっと勉強していれば、いい仕事を見つけられたのに。」と口癖のように言い続けている。

「嫉妬する目 *olhos invejosos*」は、「太った目 *olho gordo*」とか「悪い目 *mal olhado*」ともいう。本人は邪視を持っていることを知らない。

見るだけで植物を枯らしたりできる。「それがほしいわ。私にくれるべきよ」とか「彼が持っているものは私もほしい。」「私のほうが似合うわ、ちょうどいい」「もしくれなかつたら、悪いことが起きる」なんていふ人もいる、ひどいでしょう。【その人が見ても】何も起こらないときもあるけど、何かが起こったときはもうわかる。その人が太った目を持つているから。本当はその人じゃなくっても、その人のせいになってしまふ。我が家にも、どんな些細なものでも、新しいものがあつては駄目だった。最近になってあの門「約三メートルの高さがあり、覗き窓もないでの家の様子が全くみえない」を建てたお陰で、やつと落ち着けるようになった。嫉妬深い人に邪魔されなくなつた。他人の家になにかいいものがあるかを見るためだけに、家に行く人もいるから。門のお陰で良くなつたわ。

マリアは邪視のことを「唐辛子枯らし *Seca Pimenta*」とも表現した。他人の持ち物などに嫉妬し、なんでも欲しがる人が邪視持ちだ

という。邪視持ちは視線を対象物に向けることで対象物に損害を与える。被害を避けるためには、他人に羨ましく思われるような所有物などは見せないようにするべきだ、と述べた。

次は、非合法市場の路上で果物や海賊版CDを売る三十代女性。パウラの話である。パウラの夫と三人の子供も市場で働いている。パウラは「勉強が嫌いだったため」初等教育を中退している。北東部出身で、数年に一度は両親のいる故郷に戻っている。

【邪視にやられると】お菓子を作っているとき、マーガリンが固まるずい分離をしてしまう。油が浮いてくる。あなたの体に傷があるなら、それを人に見せてはいけない。腫れるからね。全員が悪い目を持っているわけではない。持っている人がいる。彼らはまず「いいね」って褒める。それだけでもう、被害者にはわかるわ。北東部にいた頃、母がナタ「牛乳の上にできる膜」をたたいてマーガリンにしようとしていた。料理とかクスクスに使うの。そのとき扉で「邪視持ちが」母を呼んだ。話をした後に台所に戻つてみると「ナタは」駄目になつていた。夫の兄弟にはそういう人がいる。私が石鹼を作つているとき、彼が来た。その途端、油が樽からあふれて石鹼が少ししかできなかつた。

パウラの夫や子供たちも邪視について同様の認識を持っていた。

夫の兄弟の一人が邪視持ちであることは夫婦の了解となつており、兄弟が家を訪ねてくるときは「石鹼作りなど、邪視に影響されそな

ものは隠す、という。パウラはまた、同じく市場で働くシモニが語った以下の話にも同調し、自分もシモニと同じような注意を払っているという。

石鹼を作るときは道行く人から見えないように扉を閉めてから作る。以前、通りから見えるところで作っていたら、一人の女性が通つて「あら、すばらしい石鹼ね。牛乳のお菓子みたいね。」って褒めていった。女性が去った途端に、夫が「わあ、どうしたんだ」と叫んだ。見てみると、膨らんでいた石鹼が急にしほんてしまつた。水のようになつてしまつて、もう元には戻らなかつた。目のせい。そういう目を持つている人がいる。嫉妬する目がすべてを壊してしまう。

パウラとシモニは、石鹼を作る作業は人目に付かないように門から離れた家の奥ですべきだと話す。シモニは話を続けた。

私は、誰かが正直さをもたずに何かを褒めるのを聞いたらすぐ内心で神に祈る。守ってもらおるよう。人の幸せを本当に喜べない人。それが嫉妬深い人。嫉妬心が強すぎて目で物を攻撃してしまふ人がいる。強い気持ちが目から出て、物を壊してしまふの。

友達のところにレモンの木があり、実がいっぱい生つていた。通りすがつた年配の女性が友人に「本当に素晴らしい木ですね」といった。女性が去つた後に木の葉が枯れ始め、次の日には全部枯れてしまった。女性の目のせいでもが枯れた。悪い視線のせいで。羨ましがるから悪い目をもつてゐる。うまく説明できないけど、人を羨ましがりすぎるのは良くないわね。

このような語りは衛星都市で頻繁に聞かれた。邪視によつて被害を受けたことがないと話す人も、邪視についての語り方は同様であった。

次に、ブラジル北東部の邪視事例をみていく。先に述べたように、ブラジルの北東部は経済的貧困地域であり、ブラジルの「後進性」を体現している地域ともいわれる。定期的に旱魃に襲われるため、都市部への移住が頻繁に行われる。次の事例の語り手はある姉妹である。姉は二十代前半で初等教育を修了したのち、家事手伝いをしている。妹は十代前半で初等教育に通つてゐる。彼女たちが住んでいるのは小さな町から車で二十分ほどのところにある数世帯が暮らす集落である。その集落に以前、邪視持ちの女性がいたといふ。

ある女性が以前、ここへんに住んでいた。背が高くて大柄で、肌の浅黒い人。とにかくおしゃべりでいい人なんだけど、目が、ね。私たちが小さなサルを飼つていたとき、彼女が家に来て何度もかわいいと

いった。そしたら次の日にサルの調子が悪くなつた。妹のことも可愛いと褒めたから、妹は次の日に病気になつた。彼女は自分が邪視を持っていることを知っているわ。こちらの人はみんな知っていたし、私の母も、ほかの人も彼女自身に言つたから。「あなたのは悪い目だ」って。

でも彼女は笑つて、真剣には受け取らなかつた。そういう目を持つた人にはんにくを渡すといい。そうすると彼女の目が悪くなくなる。でもにんにくを渡すのは彼女の目に攻撃された人でないといけない。たとえば妹ね。渡すときには特に何も言わなくてもいい。あと、邪視を避けるためには塩がいい。塩をにんにくにまぶしてドアの後ろにかけておく。

人を褒めてはいけないというわけじゃない。あなた（筆者）が妹を褒めても大丈夫。悪いことが起きるのは心の中に他の感情、嫉妬があるとき。そうすると悪いことが起きる。

この事例では、邪視の被害にあったのは小さなサルと幼かつた頃の妹である。両者とも体調が悪くなつたというが、深刻な被害といふほどではない。この事例では、邪視持ちとされる女性に対して周囲の人がそのことを指摘しているが、女性はそれを「真剣には受け取らなかつた」。他の事例と同様に、邪視持ちは自覚的でないといふことになる。

邪視除けとされるものはさまざまである。この事例では塩をまぶしたニンニクであるが、前述のパウラの娘は、ウサギの足を模つたものが邪視除けになると話す。シモニは邪視を避けるためのまじな

いを教えてくれた。

邪視を避けるには、朝起きるたびに神に祈り、外出するときにも神に祈ること。十字を切りながら。誰かがそういう目をもつていたら、やろうと思わなくとも目で攻撃してしまう。そういう悪いものはすべてどこから来る？ 悪魔からでしょう。だからさまざま悪いものから自分を守るために祈るの。「父なる神を信じ、神と共に眠りにつき、神と共に目覚める。神のご加護と供に。神とその息子、聖霊の名の下に。アーメン」。これで悪いものから身体を閉じることができる。夫は教会にはいかないけど、これだけは欠かさずにしている。

北東部でのもう一つの事例も、典型例といえるものである。人口約二万人の町に住むフランシスカ（五十代女性）は、初等教育の教師をしている。町の主な産業はハンモック生産とその行商で、初等教育を修了する前に商売をはじめる子供もいる。町の発展には教育水準の向上が必須条件だと強く主張する彼女は、熱心なカトリック教徒である。町では、ハンモックの商売によつて財をなした人や成功した人に対する嫉妬もみられる、と彼女はいう。

ここには「太った目」がある。あなたが上手く行つていると嫉妬心をもつ。そういう人に見られると駄目（悪く）になる。でもあまり信じない。神がいれば悪は入つてこない。子どもが小さい頃に、「いい子どもね」とか言われると、（その後に）子どもが怪我したりした。でも神が心の中にいれば大丈夫でしょう。悪は世の中にどこでも存在する。

でも神の言葉で大丈夫になる。だれかに見られたから物事が上手く行

かなくなつたって言う人もいるでしょう。そういうことは起こりうる。
説明も出来ないけど。でも本当に植物が枯れる。

カトリック教徒であるフランシスカは邪視からもたらされる嫉妬心によつて影響を受けるのは、自分の心に神がないからであるといふ。彼女が「信じない」というのは、邪視の力が自分の信仰心を上回るとは「信じない」のであり、邪視の存在 자체を否定しているのではない。見られることによつて物が壊れたり、植物が枯れたりすることは「説明も出来ないけど」起こりうる、という。

3・2 富裕地区での邪視

富裕地区では、貧困地区ほど邪視が可視的ではない。邪視除けの張り紙なども見受けられないし、そのような壁掛をしている家もない。邪視に対する語り方もまた、貧困地区のものとは異なつてゐる。まず、事例をみていく。

ブラジリア連邦区中心部に住むラウラは、国立ブラジリア大学卒で水道会社に勤めている。卒業前から友人とアパートをシェアしていたが、それも手狭になつたため別のアパートを購入して引越すことになった。アパート探しは困難を極め、手続きも何度も不運があつたためかなりの時間を要した。無事にアパートを購入するまでの経緯を話しながら彼女は以下のように付け加えた。

アパートを購入する話とかは、話さないほうがいい。こういうことは決まるまで、周間に言わないほうがいいの。今回のアパートのことだつ

て、探しているときや、契約のとき、資金繰り、それぞれの場面でうまく進まないことがあつた。それはいつも私が誰かに話した後だった。「いいアパートを見つけた」って誰かに話したら、そのアパートすぐ買い手がついてしまつたり、契約が決まりそうになつても、誰かに話した途端に書類が不備で戻つてしまつたり。最後なんて、（ローンを組むための許可が銀行からおりる日に）銀行がストになつてしまつたわ。そのときはもうおかしくて笑つてしまつたけど。いま、銀行の入行試験を受けるために勉強しているけど、それもあまり人には言わない。人は嫉妬深いから。決まっていないうちに言つてしまふと周りの人の嫉妬によつて上手くいかなくなる。周りの人々の嫉妬によつて上手くいかなくなる。そういう嫉妬の力（force）はとても強いものだわ。

「人に話すと、物事が上手くいかなくなる」という話はよくきかれる。ラウラと同じ地区に住むサラも他人の嫉妬心を警戒している。海外旅行を計画していたときは決定するまで周囲には漏らさなかつたし、資格取得のために試験勉強していることも明かさなかつた。サラの両親は事業に成功し、周囲からは裕福な家族として認められている。

人の嫉妬心はとても強いから気をつけないといけない。私が何でも好きなことをして生きているからといって、嫉妬する人がいる。そういう気持ちが物事を上手くいかなくさせる。だから（やりたいことなど）をあまり周間に言つてはいけない。私の母はそういうのがよく分かること。前にも「気をつけなさい、あの人はあなたのことによく思つて

いない、悪いことが起こるのを祈っている」って私に言つたわ。見たらわかるって。そういうのは目に表れるから。

大学で非常勤講師をしているパウロの家族にとって、「計画を他言ないこと」は共有された決まりごとである。彼らの規則は経験に裏付けられた家訓であり、パウロ自身も経験している。

私の家族は、何か計画を立てているときや何かが起こるのを待っているときは誰にも言わないようになることを学んだ。なぜなら、誰かに話すと、親戚に話したときでさえ、計画や期待していたものが絶対に上手く行かないからだ。父が昇進しそうなときや、なにかをまとめようとしていたときに、親戚や近所の人々に話すと必ず上手くいかなかつた。ネガティブな雰囲気（atmosfera）のせいだ。

僕がはじめて留学を考えていたとき、三度奨学金を申請して三度目にはやっと通った。三度目は本当に近しい友達を除いて奨学金に申請していることを誰にも言わなかった。だから通ったんだ。女の子を好きになるときも同じことがおきる。誰かに話すと必ず上手く行かない。最後まで誰にも言わずに女の子を口説いているときだけ、その子と交際に今までこぎつける。

パウロはこれまで何度も、他言してはいけないとわかっていないがら話してしまったことがあると、笑いながら話す。そして予想通り計画は失敗に終わった。「それは『太った目』のせいだ」。

企業のコンサルタントとして働くマリアナは高等教育を受け、海外での仕事経験もある。目や視線がモノに被害を及ぼすことは否定したが、邪視と呼べるのはあるという。

嫉妬が原因で私自身に何かが起こったことの具体例を挙げるのは難しい。が、嫉妬深い人が、たとえば身体的な状態を悪化させることは起りえると思う。あなたは、誰かのそばにいるときに非常に気分が悪くなり、その人がいなくなると急に楽になるという経験をしたことがない？私は人びとが送る否定的、もしくは肯定的なエネルギーの存在を信じる。

「エネルギー」という言葉は、マリアナのほかにマリーザが使っている。彼女は大学卒業後、音楽学校の教師をする傍ら、オペラ歌手としても活動している。友人が彼女に対して抱いた嫉妬心について、その友人と距離を置いたことで「重い荷物を降ろしたように感じた」と話す。マリーザは嫉妬の力を「悪いエネルギー」、「悪い視線」と表現する。邪視というのはその人のエネルギーに由来するもので、制御可能だという。

エネルギーというものはとても重要なものの。植物を育てられない人もいるでしょう。例えばちゃんと水をやっているのに枯らしてしまう人もいれば、ほったらかしでも植物を枯れさせずにいられる人もいる。そういうのは人のエネルギーから来ている。大人になればそういうのはコントロールできるはず。防御できるようになるの。

次に、各地区での邪視の特徴をまとめ、分析を行う。

4. 貧困地区の邪視、富裕地区の邪視

まず、邪視信仰について補足をしておきたい。邪視は個人の性格の問題として捉えられることがある。ある北東部の男性は、「悪い目」が邪視（モノに危害を加えうる）で、「嫉妬する目」や「太った目」は性格の特徴であると述べた。彼以外に同様の指摘した人はいないため、この区分が一般的であるとはいえない。しかし、邪視がモノへ危害を加えるものとしてだけでなく、性格のある特徴として語られることは頻繁にみられた。

1) (邪視が植物を枯れさせると述べた後) 悪い性格の人。なんでも欲しがる人っているでしょう。小銭のために人を殺すようなタイプの人。

2) そういう人は、とてもネガティブで悲観主義のこと。他人がうまくいくのを望まないこと。

3) 邪視をもっている人は、他人の成功を羨む人。ある女性が一生懸命働き続けてやっと家のリフォームをした。そうするとほかの人がその成功を見て、「いっぱい稼いでいるわね。自分も同じ仕事をやる。同じ機材を買って同じ仕事をし、彼女の顧客をとる」とい、本当に機材を買った。本当にひどい人。

貧困地域と富裕地域の邪視の語りは、それを性格の特徴として述べる場合には大きな違いはみられなかった。しかし、邪視を「モノ

に危害を与えるもの」として語る場合、両者の語りには大きな違いがみられる。

衛星都市と北東部の邪視には語り方に類似性がみられる。多くの場合、邪視被害をもたらす原因是目や視線にあると考えられており、目や視線それ自体の力が認められている。嫉妬心や羨む心が目から出て、モノに悪影響を与えるという。最も多い例は植物が枯れる例であった。被害が起るのは主に同日か翌日が多い。たいていは羨望の眼差しを受けた時点で被害が起こることを予測できている。ペットが体調を崩す例、料理が失敗する例、子どもが風邪を引く例などにみられるように、被害を受ける対象は所有物や小さい子どもであった。邪視持ちとされる人物は友人や知人のほかに、通りがかりの人などの見知らぬ人も含まれる点が特徴的である。スイカの事例でわかるように、邪視を放つことと攻撃を受けることそのものが一種の遊びとして受け止められている。

貧困地域でみられる邪視の特徴に対し、富裕地域のそれは大きく異なっている。邪視という言葉が用いられ嫉妬心を原因とされているが、目や視線が直接的にモノに悪影響を与える力をもっているとは考えられていない。嫉妬心は「ネガティブな雰囲気」「負の気分」「負のエネルギー」「嫉妬の力」となって攻撃を加える。貧困地域では、は物理的な損害が被害として挙げられるのに対し、富裕地域では、計画や行為などが被害の対象となる。例えば家を買う、昇進する、試験を受ける、旅行をするなどである。邪視を持っているとされる

のは友人や知人であり、見知らぬ人によるものもあるが、その場合は軽い損害しか与えない。邪視持ちが特定されないこともある。また、貧困地域で使われた邪視を意味する言葉は、富裕地域では自発的会話のなかで使われることは少なかった。邪視という言葉は「この出来事、現象を名付けるとすれば」という条件付で語られた。表にすると以下のようになる。

衛星都市・北東部

富裕地域

害をもたらす人・知人・友人・見知らぬ人

知人・友人（見知ら

ぬ人は軽い影響しか

与えない。もしくは
特定されない）

害をもたらす要因… 目・視線
被害を受ける対象… 人・物

（具体的）
エネルギー・気持ち
計画・試験など

（抽象的）

生活に与える影響… 小

（物が破損する程度／人の
場合も風邪程度）
（修復不可能なもの
であることが多い）

邪視を語る時の用語に注目すると、衛星都市や北東部では目や視線がモノに危害を与えると考へているのに対し、富裕地域ではエネルギー・力などの用語が使われていることがわかる。邪視という非合理的と考へられる事象に対し、合理的な用語が使用されている。貧困地域では邪視が「ちょっとした災難」をもたらすものとして

考へられている。植木や食べ物、モノが破損するなどの例は、日常生活において軽微の災難である。それに対し富裕地域では、逆に生活に多大な被害を及ぼしている。富裕地域で語られる邪視による被害は、入社試験に不合格となったり、不動産の購入が白紙に戻るなど、修復不可能なものであることが多い。つまり、富裕地域においては、邪視の存在がより大きなものになっているといえる。

5・さいごに

事例の分析から明らかになったのは、両地域でみられる邪視と日常生活との関係の違いである。

貧困地域では、邪視の存在が肯定され、日常生活に埋め込まれている。邪視による攻撃と被害の発生は、その場にいる人びとの間で共有されている。邪視が邪視として認められる過程として、邪視持ちの訪問による被害の予見と、実際のモノの破損がある。その過程において邪視持ちと被害者（被害物の所有者）、居合わせた第三者がそれぞれ、邪視の出来事に関与している。邪視の「事実」は、その場に同席した人びとの参与によって作り出されている。このように、貧困地域での邪視の構築は社会的であり、日常世界から切り離せない。

一方、富裕地域では、邪視は迷信としてまず一度否定される。その上で、過去の出来事を振り返る際に語られる生活史のなかで用いられる傾向がある。この場合、邪視を語る本人のみが当事者であり、

第三者や加害者（邪視持ち）は不在となる。邪視の予見と被害の発生という過程が欠落しており、邪視の存在が認められるのは、邪視が放たれる場ではなく、過去の出来事に言及する語りにおいてである。具体的には、入試での不合格や計画の頓挫などに対する事後的な説明方法である。本人や身近な人びとの身に起こった不幸な出来事を意味づけるための災因論として邪視が用いられている。

両者の違いは、災難をもたらした相手が特定されているか否か、その場に居合わせた人びとに出来事が共有されているか否かにある。つまり、貧困地域では、邪視によってもたらされる日常の出来事が相手と共有されている。邪視の出来事は個人の解釈ではなく、第三者にも認められた「事実」である。邪視をめぐる出来事は日常世界の一部として、他者との関係の中に立ち現れる。それに対して富裕地域では、相手や第三者との「事実」の共有がなされていない。邪視による被害はあくまでも個人によって考えられ、個人によって消費される災因論である。

貧困地域と富裕地域では、生活世界のなかに埋め込まれた邪視と、そこから離れたところで用いられる邪視という大きな違いがみられた。このように邪視信仰は、日常生活における他者との関係に基づく邪視と、過去の出来事の説明のために用いられる邪視にわけていくことができる。また、本論では検証に至らなかつたが、性格の一つとして表現される邪視と、被害をもたらす邪視はそれぞれ異なるものとして考えられる。今後の研究では、邪視を一つの自明なものとするのではなく、用いられるコンテキストを詳細に記述し分析する。

とが必要である。邪視をはじめとする民俗信仰を伝統としてみるのではなく、我々とともにある日常世界へと引き戻すことが求められる。

注

- (1) ゲンーレは近代化への流れのなかにある妖術の通時的な研究を行ったが、本論は共時的な研究であり、貧困地域を前近代・富裕地域を近代とするものではない。

- (2) この研究は、平成十六年度から十九年度にかけて、日本学術振興会特別研究員研究助成を受けて行われた研究成果の一部である。

参考文献

- 阿部年晴 1997 「日常生活の中の呪術・文化人類学における呪術研究の課題」
『民族学研究』第62(3)、pp.342-359。
- 伊東一郎 1991 「ロシア民話と民間信仰：邪視の文化史」 藤沼貴編著『ロシア民話の世界』早稲田大学出版部。
- 清水芳見 1983 「邪視研究の動向」『民族学研究』48 (1)、pp.91-100。
- 1989 「アラブ・ムスリムの邪視信仰—モルダン北部の村の場合」『民族学研究』54(2)、pp.166-185。
- 崔吉城 1994 『恨の人類学』 平河出版社。
- 内藤順子 2000 「日常生活の中の邪視：邪視論再考」『西日本宗教学雑誌』22号。
- 南方熊楠 「小児と魔除（原題「出口君の『小児と魔除』を読む」）」『南方熊楠全集2』 pp. 99-120、平凡社。
- FOSTER, George 1972 The Anatomy of Envy: A Study in Symbolic Behavior.
Current Anthropology 13:165-202.
- GALT, Anthony H. 1982 The Evil Eye as Synthetic Image and its Meanings

on the Island of Pantelleria, Italy, *American Ethnologist*, Vol. 9, No. 4, Symbolism and Cognition II., pp. 664-681.

GESCHIERE, Peter 1997 *The Modernity of Witchcraft- Politics and the Occult in Postcolonial Africa*, University Press of Virginia.

HERZFIELD, Michael 1981 Meaning and Morality: A semiotic approach to evil eye accusations in a Greek Village, *American Ethnologist* 8:560-574.

MOLENEY, Clarence. (Ed.) 1976 *The evil eye*, New York, Columbia University Press.

REBHUN, L.A. 1994 Swallowing Frogs: Anger and Illness in Northeast Brazil, *Medical Anthropology Quarterly* 8(4):360-382.

The Look of Jealousy — The Evil Eye and Social Disparity in Brazil

OKUDA Wakana

The widespread phenomenon of Evil Eye has always been treated in anthropology lightly, as merely a part of the larger problem of sorcery. I would argue that it deserves attention in itself. This paper addresses the phenomenon of Evil Eye in Brazil, which is here called "*olho gordo*" (the fat eye), "*olho grande*" (the big eye), or "*olhos invejosos* (the look of jealousy)". The analysis is based on the narratives from three areas, that is, a rich neighborhood of Brasilia City, a poor area of the same, and a poor district in Northeast Brazil. I show that there is an important difference in the ways narratives of Evil Eye are constructed and circulate among the rich and the poor.

In the poor areas Evil Eye is a self-evident part of the daily life. The incidents ascribed to it are usually petty problems like a tree withering in your garden, a pottery piece breaking, or a child falling sick. Another important point is that the incidents are ascribed to Evil Eye not by the person who suffered from it alone, but also by those, who were present at the time. Evil Eye is truly and actually "socially constructed".

In the rich areas, on the other hand, the existence of Evil Eye is not widely acknowledged. The incidents ascribed to it are usually very important, such as failure during examination or failure of a carefully laid out plan. The most important difference from the poor areas is that the ascription is done by the person who suffered from the Evil Eye alone, without help from others, and is done in life stories, in order to explain causes of misfortunes. Thus, in rich areas Evil Eye can be said to be disembedded from the daily life.

Key Words : Brazil / Evil Eye / Folk Belief / Social Disparity / Poverty

